

『觀心略要集』成立考(末)

西村 岡 紹

『觀心略要集』は、『往生要集』とともに恵心僧都源信の浄土教における二大名著として取り扱われてきた。しかるに、近年田村芳朗氏、奈良弘元氏、末木文美士氏が、それぞれ異った理由から偽撰説を主張されたが、いずれも偽撰の決定をみるに至っていない。

そこで、筆者は、本書の成立問題に関して文献学的、思想的方面から、多角的総合的研究を試み、昨昭和六十二年天台宗教学大会において、『觀心略要集』成立考(本)と題して発表し、遂に、本書偽撰の決定的根拠を明らかにした。

今回は、本書は、一体、いつ(撰時)、誰が(撰者)、何のために(撰述の意図)著わされたものかを見究めたい。

二 撰時について

本書の撰時については、本書が偽撰と決定した以上、従来

の資料から考えれば、源信示寂(一〇一七)の寛仁元年六月十日以降、長西(一一八四—一二六三)編の『浄土依憑経論章疏目錄』成立までとなる。しかし、これでは上下の間に二世紀半の距たりがあつて、余りにも漠然としている。さらにこれを縮めていく必要がある。

そこで、先づ本書成立の下限を探る手掛りとなる資料に『妙行心要集』がある。『妙行心要集』には、『觀心略要集』より、さらに一步進んだ念仏思想が見られるので、『妙行心要集』の方が、『觀心略要集』よりも、少し後に成立したものであるという見解は、すでに、佐藤哲英氏、末木文美士氏等によって指摘されている通りである。

両者を比較検討した結果、左記のような類似個所が見付かった。

(觀心略要集第四)

一者生滅無常。且暮難測。縱得八十年壽。人。連持未足。三万日。計其一期間日數。纔二万八千余日也。日月奔走。如策駿馬。盛

年半過。余算幾程。旃陀羅驅羊令至屠所。步步近死地。斯有何少染。無常旃陀羅。驅我令至火血刀屠所。日暮夜明。將近死地。何不驚於生涯之易暮。而修解脫生死之善根。劫初無量歲。猶有滅尽期。何況今世泡沫之命乎。昨誇紅顏。今為白骨。唯是朝露之底。貪名利。夕陽之前。愛子孫。一息出入。是名壽命。出入不通。是名命終。身煥漸冷。如木無覺。心燈忽滅。万劫不復。中有露路。孤独無伴。晝夜常行不知。邊際。深遠黑闇。無有光明。適生緣合。時神去。無數界。刹那須臾。預定諸趣生處。纔生善處。遂有其終。

(妙行心要集下之末五法性現前)

況今世人。朝露命耶。縱便有。人得八十壽。計其日數。未足三万。連持不幾。二万八千八百七十余日計也。蜉蝣飛翼。往屠羊足。念々亡身。步步近死。況老少不定。且暮難知。年過半人。殘日為幾。一息出入。是名壽命。出入無待。是名命終。設他無常。不知己天。亦悲他黑闇天。不觀我然。身煥漸冷。千歲朽木。猶以鮮。心燈忽滅。万劫不還。而迷黑闇。一刹那間。神去無數界。須臾一念。定五趣生處。生死怨家。大転輪王。不能戰勝。甚可怖畏。

(○印が両書にみられる字句)

右記のように、両書に共通して出てくる字が合計七十字も

『観心略要集』成立考(末)(西村)

あり、明らかに、『妙行心要集』は『観心略要集』の影響下に撰述されている。しかも、西教寺正教蔵の写本『妙行心要集』の奥書には、

妙行心要下

寛治六年七月晦日昼了於安楽院円経房増寛^{写本位}

の識語がみられるので、『妙行心要集』が寛治六年(一〇九二)までに成立している以上、『観心略要集』はそれ以前の成立ということになるから、『観心略要集』の成立下限は、寛治六年(一〇九二)といえよう。

次に、『観心略要集』成立の上限の手掛りとなる資料として、明賢の『誓願講式』が見付つてきた。これは、先年、山田昭全氏が、『日本仏教史学』第十五号に、「明賢作『誓願講式』をめぐって」と題して紹介された新資料である。明賢(一〇二六—一〇九八……)は、横川戒心谷の谷阿闍梨明賢と呼ばれ、当時、横川には、一澄三賢と尊称された四人の碩学がいたが、明賢はその中の一人で、中でも彼は宗義拔群にして文章秀逸であったと云われている。この明賢作『誓願講式』第三段中に、

設有^レ持^ト八十^ノ算^者、連持^ノ日^算、纔^ニ二万八千八百七十余日也。況^テ過^フ年^半者、殘^レ命^無幾^也。

という文がみられるが、平康頼は、『宝物集』の中で、首楞嚴院の明賢阿闍梨は、たとひ八十の齡をたもつとも、れん日を

かぞふれば二万八千余日、況やなかば過ぬるもの、いつをまつと
かせん。

と述べているので、『誓願講式』のこの文は、文章秀逸であつた明賢阿闍梨の自作と考えられよう。しかも、明賢が、「二万八千八百七十余日也」といつてゐるのを、康頼は「二万八千余日」と端数を省略して引用しているところから類推すれば、『観心略要集』の撰者も、明賢自作と考えられる。「六万八千八百七十余日也」を省略して「二万八千余日也」と引用したものと考えられよう。かかる推考が許されるとすれば、『誓願講式』の成立年代は、『観心略要集』成立上限の年代となるのである。明賢が四十才を過ぎて『誓願講式』を作つたとすれば、治暦三年（二〇六七）以降の作となるので、治暦三年を上限年代としておこう。

このように推考してみると、『観心略要集』は、上限治暦三年（一〇六七）から下限寛治六年（二〇九二）までの、どの年に成立したものか。最後の謎を解く資料は、『観心略要集』序文の奥書である。これには、「于_レ時強圉之載夏五月_ノ序」とあるが、この「強圉之載」の「強圉」には「丁」を指す意味と、「丁巳」を指す意味とがある。前者は、『爾雅』「積天に太歳、丁に在るを強圉と曰う」ものである。これでは「丁」の年は十年毎に巡ってきて、上限、下限の間「丁」年は、治暦三年（丁未一〇六七）、承暦元年（丁巳一〇七七）、寛治元年

（丁卯一〇八七）と三つあって、いずれか判然しないし、又これでは、源信仮託の年の判定に苦しい。『観心略要集』をよくよく読むと、この撰者は非常に良心的な人柄であることがわかる。それは後でも述べるが、源信に仮託するために往生要集の書名を出さずに、地の文に二十九文も載せていながら、敢て、積曰、先徳曰として往生要集の文を引く態度や、偽撰仮託の本書に敢て奥書を記して年を表わそうとするが如きがそれである。それで、「強圉之載」は、相当意味深いものがあるとみななければならない。後者の「丁巳」を指す意味とは、『淮南子』三、天文訓に、

大荒落之歳、歳有_二小兵_一。蚤小登、麦昌、菽疾。民食二升。巳在_二丁_一曰強圉。

とあるのがそれであり、これだと「丁巳」は明らかに承暦元年（丁巳一〇七七）であり、同年夏五月に成立したことになる。更に、撰者は本書を源信が、寛仁元年（丁巳一〇一七）夏五月に撰述した如くに仮託したわけである。（源信は同年六月十日示寂）なお又、「強圉之載」といった方が、当時の中国天台家には理解し易いといった利点もあるのである。（この理由については後述）

三 撰者について

本書の撰者については、『妙行心要集』の撰者と関連があ

るように考えられるので、先づ『妙行心要集』の撰者から調べる、左記の如く(一)源信説と(二)恵快説とがある。

〔一〕源信説

(1)文明十八年(二四八六)写、正教蔵本

(首題・撰号) 妙行心要上 恵心

(巻上末) 妙行心要集巻上

〔二〕恵快説

(1)長西(一一八四—一二六三)『浄土依憑經論章疏目錄』

妙行心要集 三卷 恵快(仏全一・三四六b)

(2)『日本国天台宗章疏目錄』

妙行心要 三卷 恵快

(3)『本朝台祖撰述密部書目』、『山家祖徳撰述目錄』

妙行心要 安楽院恵快

右のように、源信説は室町以降の伝承であり、恵快説は鎌倉以降の伝承といえよう。しかるに、『妙行心要集』より成立の早い『観心略要集』の偽撰が決定したのであるから、『妙行心要集』の源信撰述説は取るに足らない。従って、安楽院恵快説が妥当と考えられる。しかし、この恵快に関して、今まで何等の手掛りも判明せず、ただ、『妙行心要集』の序には、

夫観心乃是成仏直道也。誰有心者。不_レ遵_レ此行乎。因_レ玆先師。多年占_レ居深洞。兼_レ衡岳台崖之虚白。尋_レ三觀一心之幽玄。予雖_レ不肖。苟_レ為_レ親資。夙夜隨逐。昏曉稟承。厥後遺訓銘_レ骨。実相懸_レ

『観心略要集』成立考(末)(西村)

心。縦無_レ中的之功。何疑_レ半錢之分。今及_レ暮年。情憶_レ曩日。淚落_レ神摧。未_レ知_レ所報。仍聊錄_レ旧聞。留贈_レ後賢。兼注_レ愚慮。敢悞_レ添削。摠有_レ二百二十条。名曰_レ妙行心要集。分為_レ三卷。各列_レ其章。篇乱無_レ次。詞鄙不_レ詳。慙備_レ結縁。見者莫_レ嗤焉。

とあって、多年、居を深洞に占めていた先師に、夙夜随逐し、昏曉に稟承していた親資が恵快と考えられる。彼が暮年に及び旧聞を録して二百二十条二巻にまとめたのが『妙行心要集』だというのである。

以上のように恵快については、『長西録』を初めとする諸目録に恵快の名がみられるだけであるが、その後の調査によって二名の恵快が見付かった。一名は、曼殊院蔵『観音一印私記池上』一卷の奥書中の「文治五年……書了 恵快」の恵快であるが、文治五年(一一八九)は十二世紀末であるので、この恵快は、『妙行心要集』の撰者の恵快とは同名異人といわねばならない。いま一人の恵快は、福岡観世音寺蔵『延久元年(一〇六九)銘十一面観音像』の胎内銘中にみられる六十数名の人物名の中の一人である。これは、延久元年(一〇六九)の記録なので、『妙行心要集』が書写された寛治六年(一〇九二)より二十三年以前のことであるから、ほぼ年代は合っている。ただ、この胎内名の恵快と『妙行心要集』の撰者恵快とが同一人物であるか否かは、今後の研究に俟たねばならない。

次に、『観心略要集』の撰者を調べると、本書の序文には、何等それらしきものは見当らず、長西の『浄土依憑経論章疏目録』や江戸時代の諸版本等には、みな源信に当っている。偽撰が決定したからには、真の撰者を探さねばならない。そこで、本書を精読すると、第十問答料簡の中に、

嚴戸ニ夜深シ、只憶ニ撥闇之難ヲ。洞門ニ暁來ラ、心悅ニ慧日之漸出ヲ。
西山月傾キ、有リ便ニ慕ニ滿月之尊容ヲ。

と述べているが、これは、どうも撰者の実生活からくるところの実感を披瀝したものと推察されるのである。

一方、『妙行心要集』の序文には、「先師、多年、居を深洞に占め、衡岳台崖之虚白を羨み、三觀一心之幽玄を尋ぬ。」と述べられていて、『観心略要集』の撰者も、『妙行心要集』の撰者の先師も、ともに深洞に居住していたようである。これらの洞とは洞窟という意味もあるが、『宝物集』には、

惠心院ノ源信僧都ノ。年始ニハ必ず首楞嚴院ノ洞ヨリ出テ。朝觀ノ行幸ヲ見給ヒケルヲ。

とあるように、洞とは「大きな建物の入口」をも意味するので、『観心略要集』も『妙行心要集』も恐らく、この意味で使われているものと考えられる。

かかる推考が許されるとすれば、『観心略要集』の撰者も、源信に仮託するために『往生要集』の書名に似せているし、『妙行心要集』の撰者恵快も『観心略要集』の書名に似せて

観心成仏の妙行・心要を集めて書名としていた。書名は似ている。共に観心念仏の書である。両書の成立年代の距りも十余年と考えられる等から、『観心略要集』の撰者は、『妙行心要集』の撰者、安楽院恵快の師ではないかと推考するものである。本書の成立が、承暦三年（二〇七七）と考えられるから、当時、叡山の著名僧をみると、仁覚（二〇〇四—一〇七七）源（？—一〇七七）広等（？—一〇八〇）仙命（二〇一四—一〇九六）明実（二〇二七—一〇九二）明賢（二〇二六—一〇九八……）飯室靜算（九九七—一〇六〇……）永範（？—一〇六五……）等が存在し、又、横川には明賢を含めて当時「一澄三賢」と尊称された碩学がいたというが、本書の撰者はこの中にいるのだろうか。恵快の師は果して誰人であろうか。

四 『観心略要集』撰者の意図

安楽院恵快の師が、承暦元年（一〇七七）夏五月に源信に仮託して撰述した本書は、如何なる意図が含まれているのであろうか。それを考察するために、先づ、本書構文上の特徴を探ろう。

①序文

夫観法者。諸仏之祕要。衆教之肝心也。故天台宗。以為規模。心地観経曰。能観心者。究竟解脱。不能観者。究竟沈淪云云。当知生死之沈。与不沈者。心性之観。与不観也。爰世迄二

季。人少利根。尋其門者。難究闡奧。挹其流者。罕討淵源。何知如予。愚暗之者乎。然而志深。弘闡思切。兼濟。竊慕大師之觀心。欲開自他之慧眼。仍聊鈔祖師積文。名曰觀心略要集。觀行一門。分為十章。一。舉娑婆界過失。二。寄念弘明觀心。三。歎極樂依正德。四。辨空假中蕩執。五。積凡聖備一心。六。知流轉生死源。七。教出離生死觀。八。修空觀行懺悔。九。發真正菩提心。十。問答料簡疑也。于時強圍之載。夏五月序。

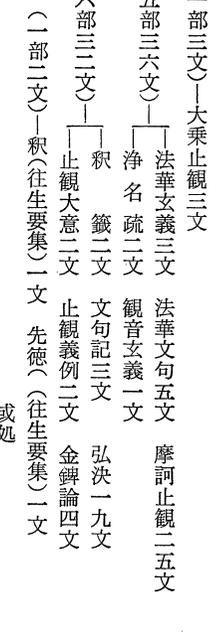
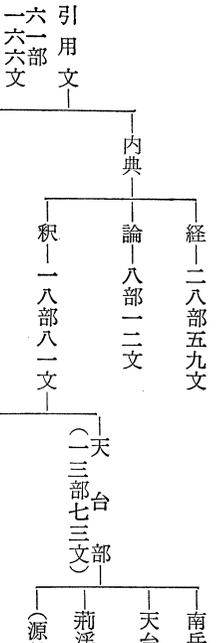
右の序文からは、明らかに源信に仮託して『往生要集』になぞらえて、十章の組織を立て、天台大師の觀心を慕って、念仏に寄せて觀心を明さんとしている。いわば、本書によって『往生要集』にみられなかった教理的補強を企てていると考えられよう。

②本書第十問答料簡の終の問答

この問答では、本書撰述の目的として、(一)自心を練らんが

ため(自利)(二)他人を誘んがため(利他)としているが、これは、源信に仮託した本書の表面上の目的とみた方が良い。

③本書の引用文



④本文中に「大師」(四回)、「天台」(二回)と云っているのは、天台大師を指す。他に「荆溪大師」「妙楽大師」「龍樹」というも、日本の大師はない。

※右表の()内の人名、書名は、本書の表面に出てこない文字である。

⑤外典を七部七文引用の他に、地の文に盛んに引用する。
（合計一三部二九回）

⑥『往生要集』を書名を出さずに、三一回引用している。
（地の文に二九回、先徳云一回、釈云一回）

以上、六つの構文上の特徴から、撰者の意図を伺うと、中国天台家を非常に意識し、敬意を払っているし、『往生要集』の教理的補足の役目を果そうとしているかみえる。中国側から何か『往生要集』批判があったのだからかと推察するに、それが充分有りうる事がわかって来た。筆者の推考では、『往生要集』が宋の天台山へ送られた。これを手にした知礼を初めとする中国天台家は、源信の博識に敬意を払いつつも、『天台観経疏』が全く引用されず、無視されたことに對して強い反発を感じたに違いない。何故ならば、中国天台浄土教は、『天台観経疏』一辺倒で、約心観仏が中心であるからである。その証拠に、成尋が五臺山に詣でた時（熙寧五年一〇七二）には、『往生要集』はどこにも流布していなかったのである。このような『往生要集』批判の声が日本へ伝わって来たので、源信にも観心念仏の思想はあったんだと、『往生要集』や『阿弥陀経略記』の思想を取り入れ、源信に仮託してまとめたのが、『観心略要集』撰者の意図したものではないかと思うのである。

1 偽撰の決定的根拠は、往生要集に「二世勤修是須臾間。何

不棄衆事（ナラズ）求淨土（ヲモトメ）哉」（大正八四・四六a）の文を、観心略要集では、「先徳云。一世勤修是須臾間。何捨衆事（ナラズ）不（ナラズ）求淨土（ヲモトメ）云云」（惠全一・三三五）と引用。往生要集に「常爲心師（ナラズ）不（ナラズ）於心（ヲモトメ）」（大正八四・六五a）の文を、観心略要集では、「釈云。常爲心師（ナラズ）不（ナラズ）爲心師（ヲモトメ）云云」（惠全一・三三六）と引用している所である。

2 観心略要集（惠全一・二八六～二八七）

3 妙行心要集下之末（惠全二・四三七～四三八）

4 妙行心要集、正教藏写本與

5 明賢『誓願講式』（日本仏教史学第十五号六一）

6 観心略要集（惠全一・二七三）

7 淮南子（漢文大系五十四・一九三）

8 妙行心要集（惠全二・二四七）

9 観音一印私記池上（曼殊院藏写本）

10 「延久元年銘十一面観音像」胎内銘（平安遺文一二三・一二四）

11 観心略要集（惠全一・三三六）

12 宝物集（仏全九三）

13 観心略要集（惠全一・二七三）

14 観心略要集（惠全一・三三六）

15 参天台五台山記第四（仏全七二・二六一b）c）

補記 最近、速水侑氏は、日本歴史483号に、『往生要集』の行方

と題する小論の中で、源信宛の周文徳の書状の中、天台山で五百余人の男女が往生要集に結縁したとか云云の讃辭は、空疏なものである旨を述べられた。知礼の態度からみて当然といえよう。

△キーワード▽ 観心略要集、観心念仏、源信仮託

（叡山学院教授）